

こめかみをピクピクさせたままタバコをとりだして先に火をつけ、フーツ…、と煙を吐き出した。椅子をくるっと右に九〇度回してわたしに正対し、おもむろに足を組んで、ニコッと笑顔でひこと、

「ね？」

なにが「ね？」なんですか。

当時は竹中直人の芸みたいに泣きながら笑ったり、眉毛をひそめながら爆笑して営業する先輩が何人かいた。客先でそういう人の横に座って、ずいぶん変わった表情をするもんだ、自分が年くつた時にああいう顔にはなりたくないものだ、と思っていた（わたしの営業成績は最悪だった）。

Kさんは泣きながら笑うかわりに自分のこめかみをピクピクさせ、ぷくつと笑い、いつも「バタバタ」していたのかもしれない。とすれば「バタバタ」も捨てたものじゃないか。

わたしはそんなKさんが好きだった。

「バタバタ」はこういうことだけれど、「ばたばた」は、北陸の山奥に出るお化けだ。

手取川の支流では、川のそばにある博物館のような施設の一角を宿泊用に借りて調査をしました。…この建物には「お化け」が出るといううわさがありました。お化けの名前は「ばたばた」。姿は見えず、スリッパかサンダルで歩くような、ばたばた、という音が夜聞こえるというのです。…真夜中の三時頃だったでしょうか。ふと目を覚ますと、階段をあがってくる足音が…。（中村智幸著『イワナをもっと増やしたい！』より）いつもバタバタして原稿を書かない人は困るけれど、ばたばたとどちが困るかと言えば悩ましい。

あざーす

単行本『朝日のあたる川』アプリ版プロジェクトの打ち合わせで、都下武蔵小金井へ行った。メンバーはわたしと著者の真柄慎一さん、それに今回の企画の言い出しっぺであるAさんの三人。真柄さんは仕事で遅くなることだった。Aさんとわたしとで駅近のファミレスで落ち合った。

Aさんは電子書籍の業界では売れっ子のクリエイターだそうだ。「ぼく、今までは黒衣くろいでした。でもこれからは自分が「スター」になろうと思うんです。」と言っていた。「真柄にはやつが旅に出る前にあれこれ世話を焼いたんです。」と自分で言っていた。

Aさんから最新の電子出版関連のレクチャーを受けつつ、アプリ版の企画について二人で盛り上がった。あつというまに二時間が過ぎた頃、わたしの携帯が鳴った。

「ちえーす。（こんにちは） 真柄っす。あざーす。（ありがとうございます） 今駅っす。どこ行けばいいっすか。」北口のデニーズにいるから、着いたら窓ガラスの向こうで顔見せてと伝えた。ところがしばらくたっても真柄さんの顔がのぞかない。インパクトある顔なのに。

Aさんと二人でファミレスの外に出た。するとなんとファミレスの入り口のすぐ脇に真柄さんが立っていて、若い娘さん二人と談笑している。

わたしとAさんの視線に気づいた真柄さんは、女子二人に「んじゃつす。」(それではさようなら)と言ってこつと笑った。自転車の小脇にひいた女子二人は、「ありがとうございましたー。」と手を振って、野菊のように微笑んだ。つられてわたしも頭を下げたが、もちろん女子はわたしに頭を下げたのではない。

三人で駅の方へ並んで歩き出したあとで、わたしは言った。それは詰め寄るといふ表現が似合う勢いだったと思う。「いったいどういうお知り合いなのですか、あのお嬢さん方とは。」

すると真柄さんは山形県人らしい鷹揚な微笑みで、「自転車出してあげてたんつす。」

デニーズの入り口脇の知恵の輪のように絡み合った自転車置き場から、女子二人は自分たちの自転車を出すのに難儀していた。それに気づいた真柄さんが、「おれが出しますよ。」と声をかけた。彼女たちの自転車を現場仕事で鍛えたパワーで、サツと取り出してあげたということだ。

Aさんが、「いやあー、やっぱり真柄だ。」と感動したように言った。

「そういうことだから、オマエは旅先でもみんなによくしてもらえたんだよな！」

真柄さんと相対すると、だれでも会った瞬間に世俗の毒気を抜かれる。この人は絶対こつちを騙さないだろうと思う。というか、自分はこの人にだけは騙されることはないという優越的で絶対的な安堵を覚える。そしてこの人の人生は大丈夫だろうかと心配になり、みんなでなにかと応援したくなる。

『朝日のあたる川』は、二十九歳の真柄さんが春夏秋冬の約九ヶ月で日本列島を巡った赤貧釣りの記録だ。

本文中で本人が繰り返し感謝の言葉を書いているように、行く先々で真柄さんは会う人、会う人から親切にされた。真柄さんの乗ったおんぼろの軽ワゴン車を、全国各地の仲間が後ろから一緒に押してまわって

いたようなものである。

さきほどの女子二人は、薄暗がりから「チャリ出しますよ。」と声をかけてきた真柄さんに対し、まずは警戒しただろう。そして真柄さんのふにやつとした顔を見て、すぐに「この人ならだいじょうぶ♡」と思つたに違いない。自転車を手早く救い出してあげた真柄さんに、彼女らも気持ちよくお礼を述べ、歓談のひとときを楽しんだのであろう。純粹な親切に、スツと心が洗われたような心持ちを味わったはずだ。

真柄さんのきわめて稀なナイーブで裏表のない資質は、持つて生まれた才能というべきキラメキである。だから彼の文章を読むとこちらのココロの闇まで晴れる。下心だけで生きているようなわたしなどは、たとえ千回生まれ変わっても真柄さんにはなれない。

三人そろって駅前の居酒屋に入った。『朝日のあたる川』アプリ版のアイデアについて、わたしとAさんとはさらに盛り上がった。しかし真柄さんは自分の本の打ち合わせなのに、まるで意見を挟んでこなかった。あとで聞いたら「だつてなに言つてるのか全然わかんないんすもん。」と笑った。

結局今回の打ち合わせで真柄さんが発した言葉は、「レモンサワーください。」と「あざーす。」だけであった。真柄さんはお店の人に、メニューのレモンサワーが「生絞りのなかさそうでないのか」をしつこく聞いていた。生絞りの方がいいのかと思つたらそうではないようで、「ふつうのレモンサワー」を頼んで満足そうに飲んでいった。

その後、電子化するための素材をわたしが作成して渡し終えたところで、Aさんが雲隠れした。

真柄さんは「Aさん、どうしたんでしょうかねえ。」と言って鷹揚に笑っている。